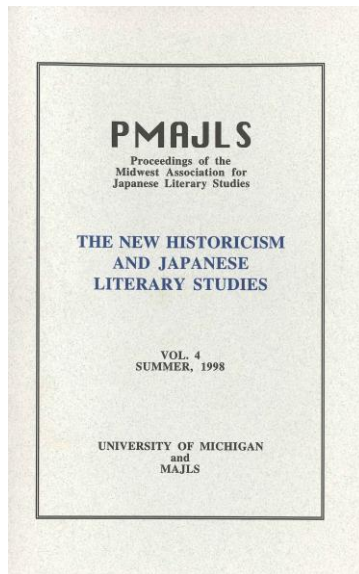


『源氏物語』のなかの交易史、権力、
ジェンダー
“Trade History in *Genji monogatari*”

河添房江 Kawazoe Fusae 

*Proceedings of the Midwest Association for
Japanese Literary Studies* 4 (1998): 265–276.



PMAJLS 4:
The New Historicism and Japanese Literary Studies.
Ed. Eiji Sekine.

『源氏物語』のなかの交易史、権力、ジェンダー

河添房江 (Kawazoe Fusae)

東京学芸大学

はじめに

『源氏物語』が成立した一条朝において、日本は鎖国状態にあり、わずかに大宰府を中心に、中国との貿易が行われていた。中国からの貴重な舶来品は、紙・布・香をはじめ、貴族生活に不可欠な品々であり、都の貴族達は、大宰府の役人からの献上品や、博多の商人からの買い上げで、それらを賄っていた。『源氏物語』の冒頭は、一条朝より約百年前の延喜年間（900年前後）に時代を設定した作品といわれるが、その当時の交易事情を踏まえて、「唐物」とよばれる舶来品が多く登場する。ここでは、ニューヒストリシズム（新歴史主義）の立場を踏まえながら、延喜年間の交易史の記録（テクスト）が、いかに『源氏物語』というテクストと相関するか、また「唐物」（舶来品）が、この作品にいかなる位置を占めるのか、をたどり見ていきたい。¹

『源氏物語』と渤海・宋との交易史の相関

梅枝巻の冒頭で、光源氏は娘の明石姫君の裳着（成女式）の準備のために、大宰府の大貳（次官）からの献上品である香木や綾・錦、さらに二条院の蔵にあった三十年あまり昔の高麗人の贈物を取りよせる。

正月のつごもりなれば、公私のどやかなるころほひに、薫物合はせたまふ。大貳の奉れる香ども御覧するに、なほいにしへには劣りてやあらむと思して、二条院の御倉開けさせたまひて、唐の物ども取り渡させたまひて、御覧じくらぶるに、「錦綾なども、なほ古き物こそなつかしうこまやかにはありけれ」と

¹その際、以前、発表した「梅枝巻の光源氏」（『源氏物語の喩と王権』有精堂、1992）を、その出発点としたい。

て、近き御しつらひのものの覆、敷物、褥などの端どもに、故院の御世のはじめつ方、高麗人の奉れりける綾緋金錦どもなど、今の世の物に似ず、なほさまざま御覧じ当てつつせさせたまひて、このたびの綾羅などは人々に賜はず。香どもは、昔今の取りならばせたまひて、御方々に配りたてまつらせたまふ。（小学館日本古典文学全集 梅枝・三九五―一六；“Plum Branch,” 511, *The Tale of Genji*, trans. by E. D. Seidensticker）

大宰府からの献上品と高麗人の贈物、この約三十年のタイムラグがある二種類の舶来品の質的差異は、じつは平安の交易史の変遷をものがたっている。光源氏は七才の時に、都の鴻臚館に滞在していた高麗（渤海国）の相人から重大な予言を受けたが、またこの高麗人は、光源氏と漢詩を作り交わし、交歓した。そして、光源氏の才能を賛美して、渤海国から持参した品々を多く贈っている。

そのころ、高麗人の参れるなかに、かしこき相人ありけるを聞こしめして、宮の内に召さむことは、宇多帝の御誠あれば、いみじう忍びて、この皇子を鴻臚館に遣はしたり。（中略）皇子もいとあはれなる句を作りたまへるを、限りなうめでたてまつりて、いみじき贈物どもを捧げたてまつる。（桐壺・一一五―一一六；“Kiritsubo,” 14-15）

渤海国との三十四回にわたる交流・交易は、724（神亀4）年にはじまり、919（延喜十九）年に終わる（上田雄・孫栄健『日本渤海交渉史』彩流社、一九九四、上田雄『渤海国の謎』講談社現代新書、一九九二）。当時、渤海国の使節は、鴻臚館に着くと、まず国書と、信物（朝廷への献上品）を朝廷に差し出し（内蔵寮に取められる）、また天皇や高官に、別貢（方物）と称する個人的な献上をした。光源氏への贈物もこうした品々と考えられる。その後、鴻臚館で内蔵寮の官人との交易や、和市を開いての民間との交易がある時もあった。²

²『三代実録』883（元慶7）年5月7日条。ただし、朝廷が民間との交易を

また、渤海国使を迎える渤海客使には、漢詩文に熟達した文官、たとえば菅原道真や嶋田忠臣などがえらばれ、共通理解のできる漢詩文を贈答することで、意志疎通をはかっていた。『文華秀麗集』巻二や『菅家文草』巻二などに、渤海国使と渤海客使が交わした漢詩が、数多く残されている。光源氏と高麗人が詩を作り交わすのも、そうした過去の記録（テキスト）を踏まえていると考えられる。

しかし、渤海国はやがて衰亡し、その使節は919（延喜十九）年を境に日本に来なくなり、都の鴻臚館や市を舞台とした渤海国との交易も途絶えた。その後、舶来品の入手は、大宰府での日宋貿易にもっぱら頼ることになり、梅枝巻の大宰府の大式からの献上品も、そうした背景を踏まえて描かれている。

渤海国との交易が終焉した延喜年間は、また日中貿易の転換期でもあった。それまでは、唐船が到着したとの報が大宰府からもたらされると、はじめは右大弁、後には蔵入所の官人から唐物使が任命され、大宰府に派遣された。そして唐物使が、朝廷の必需品をまずは買いつけるといふ、朝廷が先買権を掌握した形での交易が進められていたのである。しかし、醍醐朝には鎖国的な政策をとったことも相俟って、朝廷が外国との交易を直接に管理する時代は終りを告げた。909（延喜九）年、蔵入所から派遣された唐物使を廃止して、必需品のリストを大宰府に送り、買い上げさせるといふ方式がとられた。その後、919（延喜十九）年には、唐物使は復活したが、在廃をくり返して、十二世紀には、まったく廃止された。日中貿易で、出先機関であった大宰府が、しだいに唯一の窓口となり、対外貿易の権限を一手に掌握するにいたったのである。³

禁止する場合もあった。

³ 日宋交易の変遷については、以下の文献を参照されたい。森克己『日宋貿易の研究』（国立書院、1948）、田村圃澄「太宰府、鴻臚館、そして博多商人」（『大宰府探求』吉川弘文館、1990）、田島公「日本、中国・朝鮮対外交流史年表」（『貿易陶磁—奈良・平安の中国陶磁』1993）、亀井明德「日宋貿易関係の展開」（『岩波講座日本通史古代5』1995）など。

『源氏物語』の若菜上巻の女三の宮の裳着で、

帝春宮をはじめたてまつりて、心苦しく聞こしめしつつ、蔵人所納所の唐物ども、多く奉らせたまへり。六条院よりも、御とぶらひいとこちたし。(若菜上・三六; "New Herbs1," 569)

と、蔵人所・納所におさめられた唐物(舶来品)が放出されるのも、唐物使が活躍した後の、買い上げ品のリストを蔵人所から大宰府に送った延喜以降の時代を背景としているのであろう。なお『源氏物語』以前の『宇津保物語』では、「藤原君」に、行正の父良岑が右大弁で、唐物使になり筑紫に派遣されたという記事がみえる。これは、延喜以前の唐物使が活躍した時代を伝えるものであろう。そもそも『宇津保物語』の始巻「俊蔭」からして、894(寛平六)年の遣唐使の廃絶より以前をその舞台としている。

以上のように、交易史の上では、延喜年間(900年以降)を境に、権帥や大貳など大宰府の高官たちは、海彼の珍品を入手する利権を一身に享受することになる。貴族生活の優雅さに不可欠であった舶来品は、大宰府と直結し、博多の鴻臚館は、日本唯一の交易所として繁栄をきわめた。紫式部が中宮彰子に出仕した寛弘年間には、権帥や大貳たちの貿易上の不正による頻繁な更迭も始まっている。

玉鬘巻で、玉鬘の求婚者として登場する無骨者の大夫監も、肥後国に一族を広くもつ土着の豪族である。その「監」という官職は、大宰府の三等官であり、大宰府での日宋交易の中枢に関わりうる立場であった。玉鬘への求婚の手紙について、

大夫監とて、肥後国に族ひろくて、かしこにつけてはおほえあり、勢いかめしき兵ありけり。(中略)手などきたなげなう書きて、唐の色紙かうばしき香に入れしめつつ、をかしく書きたりと思ひたる、言葉ぞいとたみたりける。(玉鬘・八七一八九; "The Jeweled Chaplet," 390)

とあるが、「唐の色紙」「かうばしき香」はいずれも宋からもたらされた舶来品で、大宰府での交易に関わりうる立場であったことを暗示している。この大夫監は、肥後国の豪族の菊池政則（藤原蔵規）やその子則隆がモデルではないかとされている。⁴

藤原蔵規（菊池政則）は、藤原実資が領有する筑前国高田牧の牧司から、大宰大監、さらに肥後守を歴任した人物であり、実資が、中国との交易品である薬を求めた際、その仲介をつとめている。⁵

なお、紫式部の夫宣孝の甥藤原惟憲は、はじめ道長の家司であったが、その典型ともいべき悪名高い大貳（一〇二三—一〇二九）で、実資の『小右記』でも、その目にあまる強欲ぶりが、再三指弾されている。⁶

『源氏物語』に戻ると、最初にあげた梅枝巻の冒頭で、光源氏はいにしへの渤海国の舶来品をほぼ独占的に所有しているような描き方がなされている。それは、大宰府経由で宋との貿易品しか入手できない他の貴族達より、彼が物質的に優位にあることを示していよう。

以上のように、『源氏物語』の梅枝巻では、延喜年間（900年以降）の交易史の転換期のテクストをその背景とすることで、光源氏に舶来の富が集中するような構図を描き出しているといえよう。それは、『宇津保物語』の終末部が、異国をさすらった俊蔭の持ち帰った琴や莫大な唐物（舶来品）により、その子孫である仲忠一族が、帝や院を圧倒する栄華の物語であるのと好対照をなしている。交易史の転換期を背景とすることで、『源氏物語』は、『宇津保物語』のような主人公の異国への流離譚という構造をかかえなくとも、唐物（舶来品）が主人公に集中しうるような構図を作り上げたのである。

⁴高橋和夫「源氏物語玉鬘巻と北九州」（『源氏物語の主題と構想』桜楓社、1966）。

⁵『小右記』の1014（長和3）年6月25日条。

⁶『小右記』の1029（長元2）年7月11日、1031（同4）年1月16日条。

『源氏物語』に登場する「唐物」の意味

交易史と『源氏物語』のテキストの切り結びをたどったが、さらに『源氏物語』に登場する「唐物」（舶来品）全般の意義へと、問題を深化させていきたい。『源氏物語』では、海外からの舶載品、いわゆる「唐物」をいかに多く所有しているかが、権力や文化的ジェンダーの問題と密接にかかわっている。「唐物」がどのような品々を指すのか、そのリストとしては、やや時代は下るが、平安末期に成立した『新猿楽記』で、日宋交易の商人である「八郎真人」なる者が扱った品目が参考になる。そこでは、沈香・麝香をはじめとする香料、白檀・紫檀などの木材、蘇芳・丁子といった染料、銅黄や紺青といった顔料、綾や錦といった衣料、瑠璃壺や呉竹などが挙げられている。

『源氏物語』の特に第一部（桐壺～藤裏葉）では、梅枝巻が典型となるように、最も価値のある唐物は、光源氏が、財力ではなく、その才能と魅力と権威によって獲得したという描かれ方がなされることが多い。早くは若紫巻の北山の段で、

僧都、聖徳太子の百済より得たまへりける金剛子の数珠の玉の装束したる、やがてその国より入れたる箱の唐めいたるを、透きたる袋に入れて、五葉の枝につけて、紺瑠璃の壺どもに、御薬ども入れて、藤桜などにつけて、所につけたる御贈物ども捧げたてまつりたまふ。（若紫・二九五―二九六；“Lavender,” 94）

と、僧都が光源氏に、百済伝来の金剛子の数珠や、やはり高価な舶来品である紺瑠璃の壺に入れた薬を献上する条も、その典型といえよう。⁷

朝廷や院や他の貴族の邸にも、舶来品は多く所蔵されていたに違いないが、むしろ『源氏物語』の第一部は、それらを正面から描くことを避けることで、光源氏を箔づけようとする。公的な場で幅をきかせる舶来品（唐物）を優先的に所有することは、光源氏の権力と文化的ジェンダー

⁷ 「北山の光源氏」（『源氏物語の喩と王権』有精堂、1992）。

、つまり、唐の男性性（唐土の男性性／高麗の女性性）／和の女性性⁸という統括的な支配を、内外に誇示する意味をもっているだろう。そもそも『源氏物語』では、桐壺・葵・賢木・鈴虫・椎本の各巻に見られるように、「唐」「やまと」の「うた」（漢詩と和歌）を並列して挙げる例が多い。とくに光源氏は、「唐」「やまと」の文化的ジェンダーの結節点に立つ人物であった。六条院の夏の町でも、前庭に唐撫子と大和撫子の両方を植えるというバランス感覚がみえるが（常夏巻）、梅枝巻でも、光源氏が明石姫君の入内のために、みずから筆をとって書いた書の手本は、次のように描かれている。

唐の紙のいとすくみたるに、草書きたまへる、すぐれてめでたしと見たまふに、高麗の紙の、膚こまかに和うなつかしきが、色などは華やかならで、なまめきたるに、おほどかなる女手のうはしう心とどめて書きたまへる、たとふべき方なし。見たまふ人の涙さへ水莖に流れそふ心地して、飽く世あるまじきに、またここの紙屋の色紙の、色あひ華やかなるに、乱れたる草の歌を、筆にまかせて乱れ書きたまへる、見どころ限りなし。

（梅枝・四一一—四一二；"Plum Branch," 519）

ここでは、唐の紙が漢字（『源氏』では真名とよばれる）という正統な文字の草書を書くべき、紙も中でも最も格の高いものとされている。それに比べて、色合いの地味な高麗の紙は、きめ細かく、より女性的で、女手（平仮名）に調和する紙とされている。さらに、朝廷の国営の紙工場である紙屋院でつくられた華やかな薄手の色紙は、和歌を草仮名で乱れ書きするのに、ふさわしいとされている。地厚で格調の高い「唐土」の紙、薄手で色彩の華やかな「和」（ここ）の紙の中間に、柔らかで色彩の地味な「高麗」の紙が位置している。光源氏は姫君の手本の紙

⁸平安期の文化的ジェンダーについては、千野香織「日本美術のジェンダー」（『美術史』136、1994・3）を参照されたい。『源氏物語』では、若菜下巻の住吉詣の、「ことごとしき高麗唐土の薬よりも、東遊の耳馴れたるは、なつかしくおもしろく」（若菜・一六三 "New Herbs2" 594）の条も参考になる。

どして、一種類にしぼるのではなく、バランスよく三種の紙に似つかわしい書体を組み合わせて、手本を作成しているのである。それはまさに

唐の男性性（唐土の男性性／高麗の女性性）／和の女性性
公的・男性性／私的・女性性

という文化的ジェンダーを、光源氏が統括的に支配する存在であることを象徴しているのではないか。同じ梅枝巻で、弟の蛭兵部卿宮が、光源氏に、嵯峨帝自筆の『万葉集』と、醍醐天皇自筆の『古今集』を献上したのに対して、光源氏は、蛭兵部卿宮の息子の侍従に、

侍従に、唐の本などのいとわざとがましき、沈の箱にいれて、
いみじき高麗笛添へて奉れたまふ。（梅枝・四一四；“Plum
Branch,”520)

と、「唐の本」と「高麗笛」を贈っている。天皇直筆の和歌集という、まさに「和」の文化的ジェンダーの極致をしめす品々に対して、「唐土」の手本と「高麗」の笛を返すことによって、調和的な贈与をしようとした光源氏の意図をうかがうことができるだろう。品々の文化的ジェンダーを配慮し、その調和を考えると、こうした贈与のあり方は、『源氏物語』の第二部（若菜上～幻）でも、勅命により光源氏の四十賀に奉仕した太政大臣に、光源氏が贈り物を返す際にもくり返されている。

御贈物に、すぐれたる和琴一つ、好みたまふ高麗笛そへて、紫檀の箱一具に、唐の本ども、ここの草の本など入れて御車に追ひて奉れたまふ。（若菜上・九四；“New Herbs1,” 569)

太政大臣の贈り物に、楽器と書の手本を選ぶわけだが、その際、楽器では、和琴・高麗笛というふうには、「和」「高麗」のバランスをとり、また書の手本でも、唐の本とここ（和）の本というぐあいに、「唐土」と「和」のバランスをとるのである。その調和の感覚が『源氏物語』独特のものであることは、『宇津保物語』『楼の上下』の大団円で、仲

忠が、朱雀院や嵯峨院の行幸への御礼とした類似の贈り物（俊蔭の唐土の集と、高麗笛）の例から比較しても、明らかだろう。⁹

ところが、光源氏の晩年を描いた第二部では、唐物（舶来品）の描かれ方に、第一部では見られなかった変化も起きている。六条院への唐物の集中が幻影にすぎなかったかのように、六条院以外にも、豊富に唐物が存在することが明らかにされていく。特に朱雀院が女三の宮の裳着のために用意した調度や、光源氏四十賀のために玉鬘や紫の上、夕霧、冷泉帝が用意した調度に唐物は集中し、逆に光源氏を圧倒するのであった。先に引用した、若菜上巻の女三の宮の裳着の場面でも、

御しつらひは、柏殿の西面に、御帳御几帳よりはじめて、この綾錦はませさせたまはず、唐土の後の飾を思しやりて、うるはしくことごとしく、輝くばかり調へさせたまへり。（中略）帝春宮をはじめたてまつりて、心苦しく聞こしめしつ、蔵人所納所の唐物ども、多く奉らせたまへり。六条院よりも、御とぶらひいとこちたし。（若菜上・三五―三六；“New Herbs1,” 569)

と、唐物尽くしの儀式となり、朱雀院や宮中の蔵人所や納所に、六条院におとらぬ「唐物」が、豊富に存在することがうかがわれる。そして光源氏の四十賀でも、鬚黒大将家や太政大臣家に、六条院におとらぬ舶来品や楽器の名器が豊富に存在することが明らかにされ、また紫の上も光源氏の援助によらず、自力で極上の舶来品を入手している。舶来品の文化的な優位によって、六条院に人々の心を惹きつけていた光源氏は、若菜上・下巻の世界では、もはや人々が積み上げる舶来品に拝跪するほかないのである。朱雀院の五十賀宴で、主催者としての威光を示すことができなかつた光源氏は、鈴虫巻の女三の宮の持仏開眼供養でも、舶来品を惜しみなく使い、六条院の威光を示そうとする。「唐の錦」、「唐の百歩の衣香」、「白檀」など、まさに唐物の調度と共に物語に登場し、

⁹ 中島尚「うつほ物語から源氏物語へー漢と和と」（『国語と国文学』1977・11）も参照されたい。

舶来の珍獣の唐猫を愛玩した女三の宮にふさわしく、唐物尽くしの持仏開眼供養を志したのであった。ところが、女三の宮方の配慮のなさと、危うく光源氏の演出が水泡に帰すところであった。¹⁰

図式的なまとめになるが、『源氏物語』の第二部で、海外の富が強調される場面は、おおむね光源氏の文化的権威や権力がむしろ相対化される箇所といえよう。以上のように『源氏物語』における舶来の富の帰属をたどることによって、平安の交易史の変遷をかいま見るばかりでなく、第一部と第二部の断層、つまり光源氏への権力の集中から分散の構図も明らかにすることができると考える。

なお、『源氏物語』でそのほかに唐物が気になる箇所としては、一昔前の渤海国との交易品の「黒貂の皮衣」を身につけ、「唐櫛箭」を使うという、時代遅れの舶載品に囲まれた末摘花の例や、父明石入道が、地の利と財力を活かして唐物を蓄財したとおぼしき明石君の調度がある。¹¹

また、絵合巻の、「紙屋紙に唐の綺を陪して、赤紫の表紙、紫檀の軸」(竹取物語)「左は、紫檀の箱に蘇芳の華足、敷物には紫地の唐の錦、打敷は葡萄染の唐の綺なり。(中略)右は沈の箱に浅香の下机、打敷は青地の高麗の錦」という、左方・右方の唐物尽くしは、天徳三年内裏歌合に準拠したためであろう。

唐物に無縁と思われがちな宇治十帖では、宿木巻にだけ唐物が横溢するが、これも、やはり絵合巻のように準拠の問題が大きいと思われる。¹²

¹⁰ 山口量子「鈴虫巻女三宮持仏開眼供養の位相」(『玉藻』27、1991・10)。

¹¹ 明石巻「手づかひいといたう唐めき」(明石入道の筆の音)、初音巻「唐の東京錦のことごとしき縁さしたる褥に」、若菜下「高麗の青地の錦の端さしたる褥に、まほにもみで」(女楽)など。光源氏も明石君には、くるみ色の「高麗紙」の手紙や(明石巻)、「唐めいたる白の小桂」(玉鬘巻の衣配り)を贈っている。

¹² 「御しつらひなども、さばかり輝くばかり高麗唐の錦綾をたち重ねたる目うつしには」(六君の調度)、「沈の折敷四つ、紫檀の高坏」「瑠璃の御盃、瓶子は紺瑠璃なり。」(藤花宴)、「沈、紫檀、銀、黄金など、道々の細工ともいと多

Excerpt

**Gender, Power, and Continental Trade History
in The Tale of Genji**

Kawazoe Fusae

Tokyo Gakugei University

The Tale of Genji sets its story a hundred years before The Tale was actually written: it is based on the historical context of the Engi period (around the year 900). It was a transitional time in terms of Japan's trade history. Japan's trade with the Korean kingdom, which had been enhanced in the 8th and 9th centuries, ended during the Engi period (919). Trade with China also had a turning point during that period. When trade ships from China arrived at Hakata, the government would send a special delegation there so as to grab hold of the trade directly. From 909 on, the government stopped sending its own officers; instead, it started to send only a purchase list to Hakata. Dazaifu's local officers would represent the government during trade. Thus, low-ranked officers working for the Hakata office controlled distribution of luxurious imports from China and interacted with court people in Kyoto, who wanted to possess a large number of Chinese objects for status.

The Tale includes a number of episodes in which court people show off their power and authority by presenting their partners with imported objects. Genji is described as one of the privileged few who owns many imports: his strength is indicated in particular through his almost exclusive power of possessing imports from Korea. The particular way Genji plays with imported and domestic objects is indicative of his aesthetically refined authority. For instance, in an episode in the

Plum Branch chapter, as a gift for the marriage of Akashi Princess, Genji presents her with a set of model calligraphy, a set consisting of three different papers with a different style of calligraphy for each; an authentic kanji writing on Chinese paper; a graciously feminine writing of hiragana on Korean paper; and a free cursive writing of waka poems on Japanese paper. Genji's well-balanced taste is displayed by his differentiation of the three cultures on the basis of their gendered semiotics, according to which the imported cultures are associated with masculinity and its public authority, while the domestic culture is characterized as something feminine and intimately private. Such gendered metaphors are repeatedly applied when Korea is differentiated from China. Genji's strong tie with Korean culture allows him to present his imported possessions with a gendered ying-yang balance--a combination, for instance, of a Chinese book and a Korean flute.

Episodes including imported objects also articulate a change in Genji's political life. In Part One of The Tale, Genji enjoys imported luxury and possesses an overwhelming number of items. In contrast, in Part Two, which describes Genji's political decline in his later years, we realize that those objects from China are not exclusively gathered in his palace; rather, they are owned by quite a number of political leaders, imperial members and so forth. Such relativization of Genji's wealth indicates his fall -- from the single authority of the Heian court culture to a political and cultural has-been .

[E.S.]